

幼な子のよう

マタイによる福音書一八章一―二節

よく言っておく。心を入れ替えて子どものようにならなければ、決して天の国に入ることはできない。だから、この子どものように、自分を低くする者が、天の国でいちばん偉いのだ。(3、4)

天の国では誰が一番偉いのかという質問は、弟子たちがずっと関心を寄せていたことでした。名誉欲や競争心に駆られて、自分が一番になりたいと誰もが願っていたのです。主イエスは、一人の幼な子を彼らの前に置き、幼な子のようにならなければ天の国に入ることはできないと言われました。自分たちが天の国に入るのは当然であって、問題はその席順であると考えていた弟子たちの考え違いを正されたのです。天の国とは幼な子のような者だけが入るのであって、そのためには「心を入れ替え」る必要があったのです。幼な子のようにとは、純粹無垢な心を意味するものではありません。神の前に自分は何も誇ることでできない無力な存在であることを認められた者こそ、天の国にふさわしいのです。神に救っていただくしかない弱さと低さを携えて、神の前に出る者でありたいと願います。